

写真で振り返る

日出の風景と辻間楽

COLUMN 第4話
- コラム -

辻間楽の姿

1 辻間楽再開と「愛護少年団」

「辻間楽」は、昭和36年（1961）頃担い手不足により中断されていたものを、昭和56年に至り「辻間楽文化財愛護少年団」を立ち上げ少年団を担い手とすることにより再開されます。そのため現在では「辻間楽」のことを、古来から子どもが演じる芸能であったと誤って認識するくらいがあるようです。しかし、中断する以前の「辻間楽」の様子を写した古写真を集めてみると、青年らによって行われた勇壮な「辻間楽」の姿を垣間見ることができます。



辻間楽文化財愛護少年団の立ち上げ



道楽の様子（本町の通りを進む「辻間楽」）

2 木下延俊の命による変化

「辻間楽」は中世においては12名の打ち子（踊り手）により演じられていたものを、日出藩初代藩主木下延俊の命により御座船の櫓（ろ）の数と同じ72名とすることになり、より勇壮さを増して近代に伝えられたことがわかります。それは、この芸能が近世期に入って、主に参勤交代の旅の安全を祈願するものへと変化していったことにもつながっていきます。

3 「庭」と「道楽」そして「狂言」

古写真には、「庭」と呼ばれる神社への奉納の楽以外にも、その前後や大祭における神輿の巡行に従って行われる「道楽」の様子も映っており、大勢の打ち子により壮大に行われていたことが知れるのです。



庭（八津島神社境内での「辻間楽」）

その「庭」には、途中に「狂言」が興行されていました。楽の踊り手たちの少々の休息の間に、大衆を笑わせる簡単な芝居が組まれていたのです。この「狂言」は、昭和6（1931）に至り真っ先に実施されなくなります。文明の進歩・教育の発展と共に愚拙なものと思われるようになった、というのがその理由とする記録が残されています。このように戦前期には「終身」教育の影響か、大衆芸能の多くが否定され廃れていくのです。辻間楽の「狂言」にも、「大相撲」「末広がり」「雁盗人」「引きづり」「毘沙門」「口まね」「蟹山伏」「羽黒山」「養老滝」「太郎坊次郎坊」など数多くの演目がありました。しかし今では演目のみが伝えられその中身がどのようなものであったのかは、その大半がわからなくなっているのです。